

■中山きくさんの証言

・『令和7年度 なんじょう歴史文化保存継承事業 年報』p.7-29(以下、『令和7年度 年報』)

<https://nanjo-archive.jp/wp/wp-content/uploads/2026/03/%E4%BB%A4%E5%92%8C%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E3%81%AA%E3%82%93%E3%81%98%E3%82%87%E3%81%86%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E6%96%87%E5%8C%96%E4%BF%9D%E5%AD%98%E7%B6%99%E6%89%BF%E4%BA%8B%E6%A5%AD-%E5%B9%B4%E5%A0%B1.pdf>

・テキストデータ:中山 きく(なかやま きく)(旧姓津波 昭和3年生まれ 佐敷・新里)【キーワード】学徒隊(以下、テキストデータ)

<https://nanjo-archive.jp/document/?detail=226896&genre=5>

【クイズで考えよう】きくさんの小学生時代に「あった」ものはどれ？

①映画館

②学校の制服

③英語の授業

証言

・『令和7年度 年報』p.8、10

・テキストデータ:「■着ることができなかった憧れの制服」、「■ニュース映画を観て看護婦に憧れる」

【体験談を読んで考えよう】

家族の反対を押し切って看護教育へ

[1945年(昭和20)2月、二高女の稲福全栄校長は第三十二軍司令部から「生徒に看護教育を受けさせるように」という要請を受け、学校(県知事官舎のことと思われる)で4年生70人を対象とした看護教育が始められた。これは従軍補助看護婦の養成を目的としたもので、球(たま)部隊の衛生下士官(かしかん)を教官とし、主として外傷の救急処置法や、伝染性疾患とその看護法が教えられた※18。]

1945年(昭和20)の2月ごろ、佐敷村の役場を通して学校から連絡が来た。私の家には電話がなかったので、役場吏員(りいん)(役場職員)の人が伝えてくれたと思う。学校も焼けて、先生方もどこにいるかわからなかったが、現在の西原町に一間だけ借りて、校長先生と4、5人の先生方が事務作業をしていたそうだ。

連絡の内容は、家の人が許可をしてくれたら、(山部隊※19 野戦病院看護教育隊へ補助看護婦要員として入隊し看護教育を受けるために※20)3月6日に国場駅に集まりなさいというものだった。これは命令ではなかった。この連絡の内容を家族に伝え

ると、家族からは「行くな」と言われた。しかし、私は沖縄が戦場になると思っていたなかったので、「なんで、大丈夫よ」と答えた。家族も沖縄が戦場になるとは思っていなかったが、(従軍補助)看護婦になったら必ず戦地に送られるのではないかと察していたようだ。私は「赤十字の看護婦さんになりたい」と親には言っていたと思うが、十・十空襲の後だっただけに猛反対された。

私は反対する家族をほとんど押し切って家を出た。国場駅までは歩いていったと思う。千代ちゃんも来ていたが、違う字(あざ)(字佐敷)なので一緒には行かなかった。千代ちゃんは「あなたのお母さんがよく許してくれたね」と言ったが、私は「母もおばも反対していたけど、私は『看護婦さんになって、傷ついた兵隊さんを看護するのが使命というか、当たり前でしょ』と言って来たのよ」と答えた。そして「千代ちゃんのお母さんはどうだったの」と聞いた。千代ちゃんは一人っ子だったからだ。千代ちゃんは、「初めは反対されたけど、『お国のためだから仕方ない』と許してくれた」と言っていた。

佐敷出身ではないが、(国場駅には)ゆりちゃん※21も来た。ゆりちゃんは「お母さんにすまないことをした」と言っていた。ゆりちゃんのお母さんは、「お前(ゆりちゃん)までも戦争で死んだら、私も自殺するよ」と言っていたそう。ゆりちゃんのお兄さんの戦死公報が2月に届いており、お母さんが悲しい思いをしているときに「看護教育を受けたい」と言ったから、(ゆりちゃんのお母さんは看護教育を受けに行く娘を)止めようとしたのだろう。子ども2人まで戦争で殺されたら生きていてもしょうがない、と(思ったのだろう)。国場駅には何人くらいいたのか、記録もないのでわからない。実際に看護教育を受けた人数は56人だったが、国場駅にはそれだけの人数はいなかった。何人かは、仲間たちが看護教育に行ったのを知ってから、後から加わった。

国場から東風平(こちんだ)※22(現 八重瀬(やえせ)町)までは先生と一緒にいった※23。道中でははじめに校歌を歌い、その次から軍歌を歌った。歌い終わると誰かが別の軍歌を歌った。気分は高揚(こうよう)し、「これから看護教育を受けて看護婦さんになるんだぞ」という気持ちだった。その場面は記憶に残っている。ありったけの軍歌を歌ったと思う。

国場駅を出発したその日のうちに東風平の学校に着いた。(二高女の先生が)2人で東風平の学校まで送って下さったが、「軍が預かった以上、先生はいらない」と言われて先生たちだけ追い返された。そのため、私たちの看護教育に先生の付き添いはなかった。

問 1.きくさんの体験談を読んでみて、あなたなら国場駅にいきますか？

- ①行く ②行かない

選んだ理由：

手術場壕での勤務

私が手術場壕で最初にした仕事は照明係だった。軍の病院の手術場なのに電灯はなかった。他のところはランプを使っていたが、手術のときにランプは危ないとのことで、2人でロウソクを2本ずつ持ち、計4本のロウソクの明かりで軍医さんが手術をした。ロウソクは紙みたいなもので包んで持っていたと思う。

指を切るだけでも痛いのだから、手や脚を切断するのに麻酔(ますい)は絶対に必要だった。脚を切断するときには、体を直角に曲げて、背中の脊椎(せきつい)のところに麻酔をした。手の切断をする人たちには、肩のあたりに麻酔をしていた。麻酔をしたのに、メスを入れた途端、一人残らず「やめてくれ、切らないでくれ」と叫んだ。麻酔の量が足りなかったのだと思う。ほとんどの物資が不足しているときだったし、手術に時間もかけなかった。戦後、私は家族の手術に立ち会ったことがあるが、医者が患者に数を数えさせて数えるのが止まったら麻酔が効いていると判断していた。しかし、手術場壕では麻酔をしたかと思ったら、時間をかけないですぐやる(メスを入れる)から、「やめてくれ、切らないでくれ」となる。この言葉は忘れられない。患者が叫んだ途端に、軍医が「貴様、それでも軍人か」と怒鳴(どな)る。軍医も痛いのはわかっているが、そんなことは言えなかったと思う。軍医さんは上官で偉いので、患者は言われた通り、叫び声はあげないが、口を結んで唸(うな)って苦しがっていた。

私も最初のころは患者と一緒に泣いて、手術も見えていられなかった。本当は軍医さんの手元にロウソクの光を当てないといけないのに、怖くて顔をそむけていた。すると「明かりをしっかりと照らせ」と足を蹴飛(けと)ばされた。何回も蹴飛ばされ、兵隊さんの看護にきているのにこのザマは何だと、自分で反省した。ちゃんと軍医さんの手元を照らそうと何日もやっていると、怖くても顔をそらさなくなっていく。

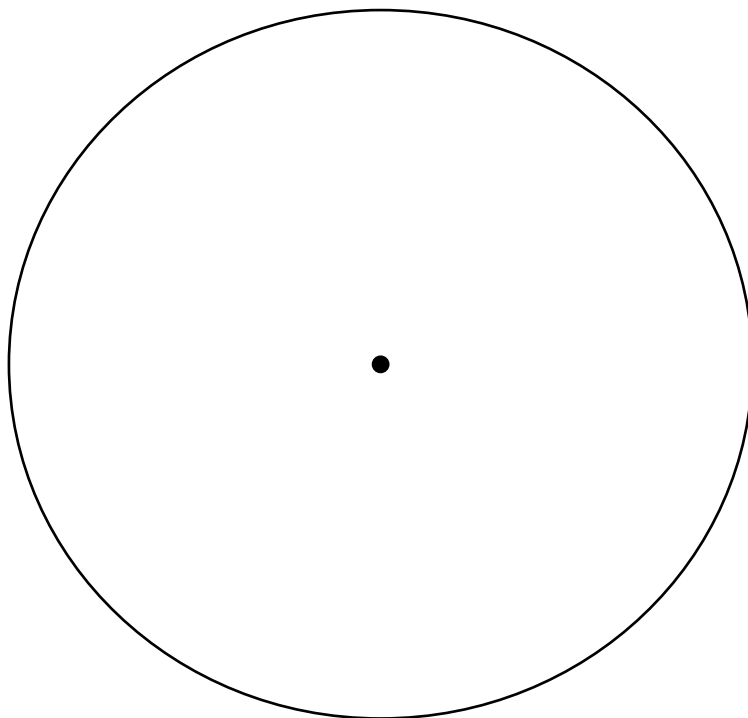
手術中に気絶してしまう人はいいいのだが、そうでない人たちは動いたりする。そんなときは「早く済みますよ、ちょっと我慢してください」と声をかけられるようになったし、手術中の様子も見るできるようになった。軍医は患部を切り捨てた後、血管をくびり、最後に皮膚(ひふ)と皮膚を縫(ぬ)い合わせていた。そのときに、患者さんに「今は血管を結んでいますよ」と状況を伝えたり、「すぐ終わりますよ」と励(はげ)ましたりすることができるようになった。

軽傷の人たちが入る場所と、切断または切開手術が必要な人たちが入る場所は別だった。切断や手術が必要な人は多いときには4、5人運ばれてきたが、ほとんどは待たされている間にそこで亡くなってしまった※33。この人なら連れて行ってもいいと思われる人たちが(病院壕に)運ばれてきて、どの人を手術するかは軍医さんが選んでいた。最初のころは1日に5人も手術をしていた。昼は(病院壕に)収容していた人たちの世話をやって、夕方から翌朝まで毎日手術がされていた※34。私たち学徒は2人ずつ交代した。

切断した手足は、毎日砲弾穴に投げ捨てていた。場所は今の八重瀬公園の駐車場になっているところで、当時は畑だった。梅雨どきだったので、砲弾穴には水が溜まっていた。また、手術場壕に勤務していた5人の学徒のうち1人だけが戦争で亡くなったが、私以外で生き延びた3人の誰に聞いても、(手術場壕勤務のときに)死体の処理や埋葬をさせられた人はいなかった。

5月半ばごろからは、薬も包帯もなくなってしまった。患者が4、5人運ばれてきても、1人ぐらしか手術をされなかった。これは軍医さんが決めていた。手術するかしないかは傷の良し悪しの程度を見て判断していたと思うが、どういう風を選んだのかはわからない。「(階級の)高い人から手術をやっていた」という人もいる。一度の手当も受けないで亡くなった人もいた。

問 2.実際に看護の仕事をしたときの、きくさんの気持ちを円グラフで表しましょう。



問 3.きくさんは学徒隊に行ったことを後悔していますか？